

FIT2025

情報教育の現状と未来 ～情報教育課程の設計指針の改訂について～ パネルディスカッション～デザイン思考

大場みち子

京都橘大学 工学部情報工学科・教授

日本学術会議第三部会員、情報処理学会フェロー、理事（長期戦略）

oba@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY

デザイン思考に対する意見・提案の概要

目的：デザイン思考を中核に、伝わり使われる学びを標準化

提案① 人を起点：観察→試す→直す（短いサイクル）

提案② 包括性：読める・見分けられる・操作できる・読み上げ可

提案③ AI協働：任せる範囲／人の判断を分け、根拠を説明

評価：成果物＋ユーザフィードバック＋改善記録

接続：同じ型を小中高大で採用、段階的に高度化

具体的な提案の詳細



提案① 人を起点

観察 → 試す → 直すの短いサイクルを授業の標準に。
→ 完成で終わらせず、改善までを成果として可視化。



提案② 包括性

読める・見分けられる・操作できる・読み上げ可を提出の共通条件に。
→ 色だけに依存しない表現、迷わない導線、キーボード操作での検証を徹底。



提案③ AI協働

任せる範囲／人が判断する範囲を明確化し、根拠を説明する。
→ プロンプトと検証ログを提出物の付帯資料として保存。



評価の観点



(A) 伝わる

情報の構造化・説明の明確さ



(B) 使える

視認性・操作の迷いの少なさ・配慮



(C) 直した

改善の証跡と理由



(D) 説明できる

判断根拠・AI活用の記録



到達目標例と評価、接続（高大連携）

到達目標例：

1つの制作で3回以上の改良サイクルを回し、改善点を言語化できる。

評価：

成果物＋使い手からのフィードバック＋改善の記録をそろえて評価する。

接続（高大連携）：

小中高大で「観察 → 考える → 試作 → わかりやすく説明」という同じ型を使い、学年が上がるほど少しずつ高度化する。